

# 『吾妻鏡』について

神奈川県立鎌倉高等学校 飯田

## 1. レポート概要

今回私が『吾妻鏡』について調べる動機となったのは、図書館である。私がかまくら学で調べる題材を探していく中で、『吾妻鏡』という言葉が多く目に入り気になったからだ。

実際に『吾妻鏡』について調べていくと、この書物に関する様々な不思議や嘘を知ることができた。なので私は今回このレポートで、この『吾妻鏡』に隠された不思議や嘘についていくつか調べていくことにした。それらを調べたことによって中世の歴史を改めて見直し、学ぶきっかけとなり、今まで知らなかった歴史の内容を知り、教わってきた歴史をさらに詳しく知ることができたため、とても勉強になった。また、『吾妻鏡』と他の書物を比較し調べたことで、書物による評価や表現の違いに気づくことができた。

## 2. 調べたことわかったこと

### (1) 『吾妻鏡』とは

「東鑑」と記されることもあり、治承4年(1180)4月～文永3年(1266)7月の約87年間にわたる鎌倉幕府の公的記録が書かれている歴史書である。書き方としては、日記体が用いられ、編年風吾妻鏡体といわれる和様漢文体で書かれており、鎌倉幕府や鎌倉時代の様子を知るための資料として高く評価されている。また、徳川家康が愛読していた書物としても知られている。巻数は諸本によって多少の違いはあるが、どれも50冊前後である。(北条本・島津本：52巻／吉川本：47巻)

活字本は日本古典大全集本や岩波文庫本など、多くの出版社で出版されており、書き下し文としても、新人物往来社で「全訳吾妻鏡」が出版されている。また、物語風にアレンジされた千秋社の「新釈吾妻鏡」や漫画として親しみやすくアレンジされた中公文庫のマンガ日本の古典「吾妻鏡」など様々な形で多くの本が出版されている。

しかし、このように歴史書としてとかく評価される一方で、『吾妻鏡』には編纂者(作者)不詳や『愚管抄』『玉葉』といった書物とは内容の書かれ方が違うことなど、様々な不思議な点が隠されているともいわれている。(吾妻鏡の方法)

### (2) 『吾妻鏡』の不思議

#### ① 書かれている期間

『吾妻鏡』は鎌倉時代のことを知る歴史書として評価されているが、書かれている期間は1180年～1266年までである。鎌倉時代は1185年頃からという考えもあるようだが、一般的に知られている年は、1192年から鎌倉幕府滅亡の1333年であるので『吾妻鏡』に記されている期間は、鎌倉時代全体から見て半分ほどであるため、ずれている上に短い。

#### ② 源実朝の死

源実朝は建久3年(1192)8月9日に父頼朝、母政子との間に生まれた次男で源氏三代将軍である。承久3年(1219)の正月27日に鶴岡八幡宮寺で宮司の別当(長官のような役割)であり実朝の甥でもある公暁に暗殺されたとされている。この実朝の死については、様々な資料があるにもかかわらず、不可解な点がいくつか挙げられる。諸本によって、異なる点があるのだ。このレポートでは『吾妻鏡』と天台宗の僧侶である慈円

によって書かれた鎌倉時代初期の史論書である『愚管抄』を例に挙げてみていく。

まずは、暗殺が行われた場所、『吾妻鏡』では「石階之際」（石階段の端）となっているのに対し、『愚管抄』では「宝前の石橋をくだりて扈従の公卿列立したる前を揖してゆきけるとき」（神仏の前の石階段をくだって身分の高い公家が並ぶ前をお辞儀をしていくとき）となっている。また、共犯についても『吾妻鏡』は供僧5人が疑われて取り調べられたが、いずれも疑いはすぐにはれて公暁の単独犯行という結果に至った。しかし、『愚管抄』では3・4人の共同犯行という結果に至っている。

他にも、実朝が暗殺された時の北条義時のいた場所について、『吾妻鏡』には楼門に入ろうとした際、心神異例で御剣を仲章(源仲章)に譲り、小町の御亭に帰ったとされている。一方で『愚管抄』には、実朝に「中門にとどまれ」と命じられた義時はそれに従い、御剣を捧げ持って中門の際に立っていたとされている。これらの記述は明らかに異なっている。他にもこのような異なる記述がいくつかある。

### ③ 記事の脱漏

まず“脱漏”とは何年も長い期間にわたって、その間の事実が全く記されていないもののことをいう。『吾妻鏡』における“脱漏”の部分は以下の通り、計10年分である。

寿永2年(1183)・建久7年(1196)・建久8年(1197)・建久9年(1198)・仁治3年(1242)

建長元年(1249)・建長7年(1255)・正元元年(1259)・弘長2年(1262)・文永元年(1264)

なぜこのように“脱漏”した年がでてきたのだろうか。鎌倉時代末期頃すでに何部か書かれていたとされている『吾妻鏡』は、鎌倉幕府滅亡後の南北朝内乱や室町時代の戦乱などを経て散逸し、戦国時代後期に右田安房前司弘詮など各大臣の努力により、吉川家の蔵本となった吉川本など多くの本に再編されたと考えられている。“脱漏”の考えられる理由としては、この再編という作業の際にどうしても先程挙げた10年を見つけることができなかったということです。

## (3) 作品の意図（推測）

### ① 誰が何のために書いたのか

『吾妻鏡』は源氏と北条氏の評価をかえて表現している。源氏については、源氏三代将軍の失敗などの汚点を至る所で指摘し、読者に源氏に対する批判など悪い印象を与えるような書き方がされている。一方で北条氏については、北条氏得宗家が行ってきた歴代の善政や業績が大きく書かれ、一度も非難されず読者に共感や感謝といった良い印象を与えるような書き方がされている。このことから、『吾妻鏡』は北条氏側の人間によって書かれたものだと考えることができる。

また、文章中にてでくる“鶴岡”の“岡”という字が普通に“岡”と書かれている場合と“丘”という字で書かれている場合があったり、“大庭景能”という人物の名も“大庭”の部分が“懐島”と書かれていたり、“景能”も“景義”と書かれている部分がある。他にも、このようなことが多く行われている。このことから、編纂者は一人ではなく複数人いたのではないかと考えることができる。

つまり、『吾妻鏡』は北条氏側の人間によって北条氏得宗家の行ってきたことを肯定し北条氏が政治の実権を握ることを正当化させるために書かれたものであるという推測ができる。このように考えることで、(2)で挙げた不思議についての真相も推測することができる。

### ② 不思議の真相

ここでは、編纂者が北条氏側の人間であると仮定して、(2)で挙げた不思議の真相について見ていく。まずは、①の源実朝の死の北条義時がいた場所。『愚管抄』では実朝に命じられ、中門に立っていたとされているが、北条氏側の人間としては北条氏の人間が源氏の人間に命令され、それに従っていたという事実を記すことを避けたかったため、あえて嘘の記述をしたと考えることができる。

次に②の脱漏している年について。②でも書いた通り、再編する際にどうしても見つけることができなかつた年と考えるのが正しい感じもするが、北条氏側の人間によって書かれたのだとすれば、北条氏にとって都合の悪いことが起こったため、記すことをやめた年と考えることもできる。

最後に③の書かれている期間について。なぜ鎌倉幕府が滅亡する元弘3年(1333)ではなく文永3年(1266)という半端な年で終わっているのか。この時代、源氏三代にかわり北条氏が政治を行っており、その政治体制がくずれたためと考えることができる。先程も書いたとおり、『吾妻鏡』では北条氏の汚点には触れず悪く書くことはないので、ここから先の時代の様子については記す必要がないと判断されたとしてもおかしくはないと考えられる。

### 3. まとめ

今回、私はかまくら学でこの『吾妻鏡』について調べていく中で多くの驚くことがあった。まず驚いたのは、歴史書なのにもかかわらず普通に嘘の記述がされていることである。歴史書は、歴史上で起こった様々な事柄を記録し、残していくためのものだと私は考えているので歴史書に嘘の記載があるということ考えることがあまりできなかったのである。また、未だに解明されていないような謎が存在しているということに対しても驚いた。これらの驚きは編纂者の立場や性格など、ひとつひとつ丁寧に考え予想していけば、納得がいくこともあるのだということが分かった。

例えば『吾妻鏡』の場合、レポートでいくと編纂者は北条氏の関係者である。そうすると、北条氏に関することで汚点となるようなことは書けず、悪い印象を与えるような書き方をすることもできない。結果少し事実を曲げて記載せざるを得ないと考えることができる。

このように、『吾妻鏡』は複数の編纂者によって様々な人間性や感情が込められた作品だということが分かった。

#### 【引用・参考文献】

「吾妻鏡の謎」 奥富敬之／吉川弘文館

「都市鎌倉の中世史～吾妻鏡の舞台と主役たち～」 秋山哲雄／吉川弘文館

「吾妻鏡必携」 関幸彦・野口実／吉川弘文館

「吾妻鏡の方法～事実と神話に見る中世～増補」 五味文彦／吉川弘文館

「鎌倉の中世探訪『吾妻鏡』を歩く」 末廣昌雄／岳書房

「金沢文庫と『吾妻鏡』の世界」 末廣昌雄／岳書房

「中世都市鎌倉を歩く～源頼朝から上杉謙信まで～」 松尾剛次／中公新書

「郷土歴史人物事典神奈川」 沢寿郎・神奈川県史研究会／第一法規

「新編鎌倉事典」 涌田佑／文芸者